老年期における回想の質と適応との関連

野村 信威
(同志社大学大学院文学研究科)
橋本 宅
(同志社大学文学部)

問題
回想とは、かつて経験したことを再認識をともなって再生することや、過去について思いをもたすことと考えられている。回想は日々の生活において様々な形でわれ、特定の目的のもとに意識的に振り返る場合もあり、何らかの刺激の結果として思い出が自然に心に浮かび上がることもある。

一般に老年者は、若年者に比べて頻繁に過去を振り返り、思い出す傾向が多いとされている。しかし老年者にとって過去を振り返る行為は、単に過去を懐かしんだり、現在の自分から注意を背負うためだけではなく、より積極的な意味をもつものとして捉えることもできる。

Erikson, Erikson, & Kivnick (1990) によれば、老年期における発達課題は「統合対絶望」という名前であり、これらを反対するものとしてバランスをとることで、単なる理性的苦悩や葛藤に終わらない「創造的な緊張」を経験することが生きるための必要を生み出すとされている。そしてそのために、「これまでの経験を思い出し再検討しようとする意図」が必要であると述べている。そのため過去の経験を再検討する機会となる回想は、老年期の発達課題を達成するための具体的な手段のひとつに挙げることが出来るだろう。

アメリカの精神科医であるButler (1963)は、老年期にしばしば認める、過去を振り返る行為としての回想は、自己の歩んできた人生を回顧して未解決の葛藤を解決することをうながす自然で普遍的な心的プロセスであり、回想には適応的な効果があると述べた。そして老年期に共通して認められるこうした心的プロセスをライフレビュー（life review）と名付けた。

Butlerによる提唱の後、回想法は広く臨床・実践の場に取り入れられ、多くの研究者の注目を集めた。

Coleman (1974)は回想の効果に関する先駆的的研究において、48名の施設入居高齢者に対して約1時間の回想面接を6セッション行った。その際に回想を、単に過去について言及する単純な回想（reminiscence）、重要な出来事を他者に伝える情報付与的回想、そして過去についての積極的な心理的解析が生じるライフレビューの3つのタイプに分類し、それぞれの回想が及ぼす適応的効果について検討した。その結果、過去の人生に不満がある場合にライフレビューは適応度と関連することを見出した。すなわち過去の人生に不満がある場合、ライフレビューを積極的に行う者はそうでない者よりも有意に適応度が高く、ライフレビューをすることが過去のネガティブな影響を低めてより適応的に生きる効果を生み出すと考えられた。

その後行われた回想研究では、しばしば回想のもつ質や機能の分野に関心が向けられ、いくつかの異なるタイプの回想が存在することが示唆されている。例えばLoGerfo (1980) は、回想には快の感情をもとしない気分を高揚させる情報付与的回想、過去の葛藤や失敗を調整する機会となる評価的回想、そして後悔の念をもとなら記憶が非建設的に繰り返し生じる強制的回想の3つのタイプがあると述べている。

またRomanuik, & Romanuik (1981)は13項目からな
このように回想の定義が充分に明確ではないこと、対象者の条件が研究間で異なりその比較が容易でないこと、そして回想研究の方法論的な難しさなどが挙げられている（Merriam, 1980; Molinari, & Reichlin, 1985）．そしてこれらの要因に加え、回想の質的次元と量的次元が区別して捉えられていなかったこともその原因の一つと言えるだろう。

回想の質と量とが、それぞれに異なる特徴について検討した研究がある（例えば、Webster, 1995）．研究はわくわくするが、在宅および施設入居高齢者140名を対象に構造化面接を行った、Fry (1991)による研究は重要な示唆を与えている．彼の結果より、回想の量的および質的次元はそれぞれ独立しており、さらに回想量とその情緒的性質は、適応度との関連において対照的に異なることを見出した．すなわち、回想の情緒的性質がポジティブである場合、過去の満足度や主観的幸福感は高く、抑うつ性の高い場合には低かった．しかし回想の量が多い場合、人生満足度や主観的幸福感は低く、抑うつ性の高い場合には高かった．

本研究では、回想行為そのものが適応度と関連するというよりも、むしろ回想が適応度により異なると仮定した．そして回想の質的、量的、および適応度の三つの側面として、「回想の情緒的性質」、過去のネガティブな出来事を再評価する傾向を量・質・適応度との関連について検討を試みる．本研究では、回想の質的、量的、および適応度との関連について検討を試みる．本研究では、回想の質的、量的、および適応度との間の関連について検討した．その結果、老齢群よりも学生群より高い回想傾向が認められ、老齢群よりも過去を思い出す傾向は認められなかった．老齢群では、回想量の多さは現在の満足度の低さや死への不安の強さと関連し、老齢期において回想を頻繁に行うことは現在の満足度の低さと関連している可能性を示唆した．

このような回想の量的次元に関する研究では、しばしば適応度との間に正の関連が認められないために、回想の適応的効果が疑問視される．この事情はネガティブな側面が影響されることの多いからである．また回想の適応的効果を認めない研究は、量的次元を検討した場合に限らず、これまでにも報告されている（例えばPerrotta, & Meacham, 1981）．そのため回想のもの適応的効果は一般に広く支持されているにも関わらず、その効果に関する実証的研究では、一致した結論には到達していないと考えられてきた．

こうした回想研究に認められる結果の不一致の理由と
予備調査

われわれは予備調査において、回想の情緒的性質および過去のネガティブな出来事に対する再評価傾向を測定する尺度を作成した。

質問項目は、事前に行った16名の高齢者に対する回想面接において、高齢者が述べた「ポジティブまたはネガティブな感情や認知をともなう回想」と「過去のネガティブな出来事に対する再評価」に関するコメントをもとに作成し、さらに長田・下仲・中里・河合（1993）による先行研究を参考にして質問項目を補った。

その結果、「ポジティブな感情や認知をともなう回想」に関する15項目、「ネガティブな感情や認知をともなう回想」に関する8項目、そして「過去のネガティブな出来事に対する再評価傾向」に関する15項目に整理した。これらの尺度は自分にどの程度あらかじめかについて、「そう思う（5点）」「あまりそう思わない（1点）」どちらでもない（3点）」「あまりそう思わない（2点）」「そう思わない（1点）」の5条件で評価された。

予備的な質問紙調査を大阪市内の社会福祉センターに通所する60歳以上の人70名に依頼して郵送により回収した。その結果、複数の記入例のある回答をのぞいた115名（男性39名、女性76名、平均年齢71.2歳、標準偏差5.5歳）を対象として統計処理を行った。

作成した3尺度に対して、主因子法・プロマックス回転（斜交解）による因子分析を行い、固有値1を基準としてとした場合、3つの尺度からはそれぞれ複数の因子が抽出された。しかし全ての尺度で初期解において1因子に高い説明力が示され（35.4〜43.9％）、主に逆転項目からなる解釈不可能の因子を除くと、プロマックス回転後の因子間関係も比較的高かった（r=.398〜.589）。そのとおりこれらの尺度が単一の因子によって説明可能であると考えた。その上で因子負荷量が0.35に満たない6項目を削除し、因子数を1とする因子分析を再度試みた。その結果、3つの尺度全てにおいて1因子による高い説明率が認められた（40.9〜48.8％）。これらの尺度が単一の因子構造をもつものと判断した。

以上の結果をもとに14項目からなる肯定的回想尺度、6項目からなる否定的回想尺度、そして12項目による再評価傾向尺度とした。ただし肯定的回想尺度は「良い思い出の多さ」を表すものの、回想することによっていった気分になったり良かっただと思われる程度を表す指標である。否定的回想尺度についても同様である。そのためこれら2つの尺度は、「回想におけるポジティブあるいはネガティブな感情や認知の想起のしやすさ」つまり回想の情緒的性質を測定している。

肯定的回想尺度、否定的回想尺度、そして再評価傾向尺度の質問項目、Cronbachのα係数、各項目における因子負荷量および共通性の値をそれぞれTable 1、Table 2およびTable 3に示した。

回想の情緒的性質を測る指標としては、現在までに長田・下仲・中里・河合（1993）によるサクセスフル・レミッション尺度（SR尺度）がある。SR尺度は「快の感情をもとにして深く広がりをもつ回想」の指標として定義された14項目からなる尺度である。肯定的回想、否定的回想尺度とSR尺度との相関を求めたところ、肯定的回想（r=.639、p<.001）と否定的回想（r=-.555、p<.001）のどちらも高い相関が認められ、この結果はこれらの尺度の併存的妥当性を示すと考えられた。

性格特性との関連
さらに作成した尺度の基準関連妥当性を検証するため、性格特性の指標である日本版NEO-FFI（NEO Five Factor Inventory）を用いてその関連を
Table 1 肯定的回想尺度の質問項目、因子負荷量および共通性

<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>因子負荷量</th>
<th>共通性</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>①</td>
<td>0.818</td>
<td>0.669</td>
</tr>
<tr>
<td>②</td>
<td>0.779</td>
<td>0.606</td>
</tr>
<tr>
<td>③</td>
<td>0.763</td>
<td>0.583</td>
</tr>
<tr>
<td>④</td>
<td>0.739</td>
<td>0.546</td>
</tr>
<tr>
<td>⑤</td>
<td>0.699</td>
<td>0.488</td>
</tr>
<tr>
<td>⑥</td>
<td>0.688</td>
<td>0.473</td>
</tr>
<tr>
<td>⑦</td>
<td>0.675</td>
<td>0.456</td>
</tr>
<tr>
<td>⑧</td>
<td>0.665</td>
<td>0.442</td>
</tr>
<tr>
<td>⑨</td>
<td>0.664</td>
<td>0.441</td>
</tr>
<tr>
<td>⑩</td>
<td>0.660</td>
<td>0.436</td>
</tr>
<tr>
<td>⑪</td>
<td>0.654</td>
<td>0.428</td>
</tr>
<tr>
<td>⑫</td>
<td>0.611</td>
<td>0.374</td>
</tr>
<tr>
<td>⑬</td>
<td>0.519</td>
<td>0.269</td>
</tr>
<tr>
<td>⑭</td>
<td>0.370</td>
<td>0.137</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（*は逆転項目） 固有値 6.35，寄与率 45.3%，Cronbachのα係数 .918

Table 2 否定的回想尺度の質問項目、因子負荷量および共通性

<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>因子負荷量</th>
<th>共通性</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>①</td>
<td>0.837</td>
<td>0.701</td>
</tr>
<tr>
<td>②</td>
<td>0.702</td>
<td>0.493</td>
</tr>
<tr>
<td>③</td>
<td>0.691</td>
<td>0.477</td>
</tr>
<tr>
<td>④</td>
<td>0.689</td>
<td>0.475</td>
</tr>
<tr>
<td>⑤</td>
<td>0.674</td>
<td>0.454</td>
</tr>
<tr>
<td>⑥</td>
<td>0.573</td>
<td>0.329</td>
</tr>
</tbody>
</table>

固有値 2.93，寄与率 48.8%，Cronbachのα係数 .845

検討した。

老年群は京都府内にある老人大学の受講者を対象に質問紙調査を依頼した。質問紙は配布時に返信用封筒を添付し、郵送で回収した（有効回答率は75.9%）。学生群は京都府内の私立大学において心理学関連講座を受講する大学生に調査を依頼し、一週間後に回収した。その結果、被調査者は老年群は164名（男性102名、女性62名）で平均年齢は68.4歳（57～83歳、標準偏差5.0歳）、青年群は220名（男性95名、女性125名）で平均年齢は20.3歳（18～25歳、標準偏差1.2歳）だった。

NEO-FFIはCosta & McCrae (1992) によるNEO-PI-Rの短縮版であり、下仲・中里・権藤・髙山 (1999) により標準化された。神経症傾向（N）、外向性（E）、開放性（O）、協調性（A）、誠実性（C）の五次元の性格特性を構成する60項目に対して5件法で評定する。

また回想の指標には、作成した3つの尺度のほかに、長田・長田 (1994) による回想尺度を加えた。この尺度は、個人の回想性を測定する9項目の尺度であり、日常生活の様々な場面で回想する頻度を「よく考える」から「考えない」の4件法で評定する。

NEO-FFIを説明変数とし、回想に関する4つの尺度を従属変数とし重回帰分析を青年群および老年群の男女4群に対して行い、その結果をTable 4に示した。

肯定的回想の程度を4群すべてで一貫して説明する性格特性は見出されなかった。しかし老年女性群と青年男性群では外向性の次元から、また老年男性群と青年女性群では協調性の次元から説明され、ポジティブな回想の想起やすさは、外向性や協調性といった性格特性から部分的に説明できると考えられた。

否定的回想は老年女性群をのぞく3群に共通して神経
日本社会発展心理学学会（JSDP）

Table 3 再評価傾向尺度の質問項目、因子負荷量および共通性

<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>因子負荷量</th>
<th>共通性</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>③いやなことに対して今ではうちがった見方をする</td>
<td>.743</td>
<td>.551</td>
</tr>
<tr>
<td>④いやなことでも、あとで思い返すとプラスになったと思うことがある</td>
<td>.741</td>
<td>.549</td>
</tr>
<tr>
<td>⑤いやなことでも後から思い出すと思う</td>
<td>.710</td>
<td>.504</td>
</tr>
<tr>
<td>⑥いやなことも、自分にとって意味があるものだと思う</td>
<td>.688</td>
<td>.474</td>
</tr>
<tr>
<td>⑦いやな出来事のつらい側面に気づくことがある</td>
<td>.699</td>
<td>.448</td>
</tr>
<tr>
<td>⑧いやなことがかえって落ち着ぐ気があることがある</td>
<td>.655</td>
<td>.429</td>
</tr>
<tr>
<td>⑨いやなことでも教訓や意味になると思う</td>
<td>.648</td>
<td>.419</td>
</tr>
<tr>
<td>⑩以前はいやだったことも、今では受け入れている</td>
<td>.647</td>
<td>.418</td>
</tr>
<tr>
<td>⑪いやなことがあったからこそ今の私がある</td>
<td>.552</td>
<td>.305</td>
</tr>
<tr>
<td>⑫以前いやだったことも、今はあまりいやではない</td>
<td>.544</td>
<td>.296</td>
</tr>
<tr>
<td>⑬いやなことのつらい意味や価値についてよく考える</td>
<td>.538</td>
<td>.290</td>
</tr>
<tr>
<td>⑭いやなことは自分にとって何の意味もない*</td>
<td>.478</td>
<td>.229</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（* は逆転項目） 因子負荷 4.91，寄与率 40.9%，Cronbachのα係数 .887

Table 4 回想指標に対する性格特性（NEO-FFI）の重相関分析

<table>
<thead>
<tr>
<th>回想量</th>
<th>神経症傾向（N）</th>
<th>外向性（E）</th>
<th>開放性（O）</th>
<th>協調性（A）</th>
<th>蔦実性（C）</th>
<th>重相関係数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>老年男性群</td>
<td>.431***</td>
<td>-228*</td>
<td>.236*</td>
<td></td>
<td></td>
<td>.407</td>
</tr>
<tr>
<td>老年男性群</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>.499***</td>
</tr>
<tr>
<td>青年男性群</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>.290**</td>
</tr>
<tr>
<td>青年男性群</td>
<td>.244*</td>
<td>.220*</td>
<td>.263*</td>
<td></td>
<td></td>
<td>.445***</td>
</tr>
<tr>
<td>肯定的回想</td>
<td>老年男性群</td>
<td>.325*</td>
<td>-308*</td>
<td></td>
<td></td>
<td>.630**</td>
</tr>
<tr>
<td>老年男性群</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>.574***</td>
</tr>
<tr>
<td>青年男性群</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>.423***</td>
</tr>
<tr>
<td>青年男性群</td>
<td>.199*</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>.484***</td>
</tr>
<tr>
<td>否定的回想</td>
<td>老年男性群</td>
<td>.431***</td>
<td>.244*</td>
<td></td>
<td></td>
<td>.310**</td>
</tr>
<tr>
<td>老年男性群</td>
<td></td>
<td></td>
<td>.226*</td>
<td></td>
<td></td>
<td>.594***</td>
</tr>
<tr>
<td>青年男性群</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>.445***</td>
</tr>
<tr>
<td>青年男性群</td>
<td>.506**</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>.555***</td>
</tr>
<tr>
<td>再評価傾向</td>
<td>老年男性群</td>
<td>.512**</td>
<td>.227*</td>
<td></td>
<td></td>
<td>.357*</td>
</tr>
<tr>
<td>老年男性群</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>.520*</td>
</tr>
<tr>
<td>青年男性群</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>.355</td>
</tr>
<tr>
<td>青年男性群</td>
<td>.234*</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>.214*</td>
</tr>
</tbody>
</table>

数値は標準回帰係数 *p<.05 **p<.01 ***p<.001

在年期における回想の質と適応との関連

症傾向の次元から説明され，ネガティブな回想の想起やすさは神経症傾向から説明できた。

再評価傾向を老年男性群をのぞく3群に共通して説明性の次元から説明された。しかし老年男性群では再評価傾向は開放性の次元から説明され，さらに老年女性群では再評価傾向を神経症傾向によっても説明されると考えられた。

回想量の多さを一貫して説明する性格特性は見出されなかったが，老年男性群と青年男性群ではともに回想量が神経症傾向から説明され，男性では回想量が多いうことは神経症傾向により説明できると考えられた。

Costa, Metter, & McCrae (1994) は性格特性の各次元において，外向性（E），協調性（A），誠実性（C）はそれぞれ適応度と正の相関を示し，神経症傾向（N）は適

NII-Electronic Library Service
目的
回想の感情特性および過去のネガティブな出来事に対する再評価傾向を取り上げ、青年期との比较を通して、老年期における回想に特徴的な適応度との関連について詳細な検討を試みることを目的とした。

方法
被調査者　老年群は京都市内にある老人大学の受講者を対象に質問紙調査を依頼して郵送で回収した（有効回収率は70.4％）。学生群は京都市内の私立某大学で心理学関連講座を受講する大学生および大学院生に調査を依頼し、一週間後に回収した。その結果、被調査者は老年群は208名（男性111名、女性97名）で平均年齢は67.8歳（60～82歳、標準偏差4.6歳）、青年群は197名（男性90名、女性107名）で平均年齢は20.8歳（18～30歳、標準偏差1.9歳）だった。

測度　回想に関する指標には、予備調査で作成した肯定的回想尺度（14項目）、否定的回想尺度（6項目）、再評価傾向尺度（12項目）に加えて、長田・長田（1994）による回想尺度を回想度の指標として用いた。

本研究では、適応度を被調査者の主観的な側面に限定し、人生満足度や抑うつ、自尊心の程度として操作的に定義した。適応指標に以下の3つの指標を用いた。
（2）抑うつ尺度（Geriatric Depression Scale: GDS）　Yesavage, Brink, Rose, Lum, Huang, Adey, & Leiter (1983)により作成され、Niino, Imaiizu, & Kawakami (1991)により日本版が作成された。10項目からなる尺度で、「はい」「いいえ」の2件で評定する。得点が高いほど抑うつの症状を示す。
（3）自尊感情尺度（Rosenberg Self-Esteem Scale）　Rosenberg (1965)により作成され、山本・松井・山成（1982）により日本版として標準化された。10項目からなる尺度で、「あてはまる」から「あてはまらない」の5件法で回答する。得点の高さは自尊心の強さを示す。

結果および考察
回想尺度間の関係　はじめに回想尺度間の関連について検討した。回想尺度間の相関を算出するにあたっては、世代および性別ごとに相関を求めた（Table5および6参照）。
その結果、老年男性群と青年群の男女で肯定的回想と再評価傾向の間に中程度の正の相関が認められた。そのような対象群を除けば、ポジティブな回想はネガティブな出来事の再評価傾向と関連すると考えられた。
肯定的回想と否定的回想は老年群で有意な負の相関が認められた。しかしながら相関係数の値は低く、想起のしやすさにおいて両者は互いに独立するものと考えられた。
また回想量は、概して回想の質的指標とほとんど関連しなかったが、青年男性群でのみ全ての回想の質的指標と有意な相関を示し、なかでも否定的回想と回想量の間にはやや強い相関が認められた（r=.525, p<.001）。

Table 5　老年群における回想尺度間の相関

<table>
<thead>
<tr>
<th>回想量</th>
<th>肯定的回想</th>
<th>否定的回想</th>
<th>再評価傾向</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>回想量</td>
<td>0.50</td>
<td>0.16</td>
<td>0.17</td>
</tr>
<tr>
<td>肯定的回想</td>
<td>0.188*</td>
<td>0.190*</td>
<td>0.265***</td>
</tr>
<tr>
<td>否定的回想</td>
<td>0.109</td>
<td>0.405***</td>
<td>0.323***</td>
</tr>
<tr>
<td>再評価傾向</td>
<td>0.605</td>
<td>0.137</td>
<td>0.136</td>
</tr>
</tbody>
</table>

Table 6　青年群における回想尺度間の相関

<table>
<thead>
<tr>
<th>回想量</th>
<th>肯定的回想</th>
<th>否定的回想</th>
<th>再評価傾向</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>回想量</td>
<td>0.248*</td>
<td>0.137</td>
<td>0.136</td>
</tr>
<tr>
<td>肯定的回想</td>
<td>0.525***</td>
<td>0.092</td>
<td>0.262***</td>
</tr>
<tr>
<td>否定的回想</td>
<td>0.335**</td>
<td>0.508***</td>
<td>0.107</td>
</tr>
<tr>
<td>再評価傾向</td>
<td>0.605</td>
<td>0.137</td>
<td>0.136</td>
</tr>
</tbody>
</table>
世代および性別による相関 調査に用いた4つの回想尺度について、世代および性別による得点の相関を検討するため、世代別および性別の回想量を独立変数とする2要因の分散分析を行った。Table 7には、適応指標を含めた各指標における4群ごとの平均数、標準偏差および各要因のF値を示した。

その結果、世代および性別による交互作用が肯定的回想および否定的回想において認められた。単純主効果の検定の結果、肯定的回想は老年群では性別による得点の差はなく、青年群では男性よりも女性の得点が高かった（F(1,397) = 11.27, p<0.001）。また否定的回想は、青年群では性別による差はなく、老年群では男性がより得点が高かった（F(1,400) = 5.74, p<0.05）。世代および性別それぞれの主効果が回想量別の回想傾向で認められ、青年群は高年群よりも過去を再評価傾向が高く、女性は男性よりも再評価傾向が高かった。

なお回想量はいずれの主効果および交互作用も有意でなく、世代や性別による回想量の違いは認められなかった。この結果より、一般に考えられる老年期により過去を振り返る傾向は支持され、青年期により頻繁な回想が行われることを示した（長崎、1994）の結果と異なるが、老年者が必要されて回想を行わないという点では一致するものだった。

適応指標との関連 ところで、本研究の調査方法は、質問紙を用いた相関研究にあたり、回想を行うことによる生じる適応的な効果を直接検討することは出来ない。また記憶における気分一致効果の研究では、過去を想起する際の感情状態が想起される内容に影響を及ぼす可能性が指摘されており（例えば筒香、2000）、回想から適応への一方的な因果関係を規定するべきではない。しかしながら回想が適応に及ぼす効果はこれまでにも示唆されており（例えばHaight, 1988）、本研究でも同様の因果関係を仮定した上でそれらの指標間の関連を検討することは充分に意義があると考えた。

回想に関する指標のうちのいずれも適応度の高さを説明するのかもを検証するため、人生満足度および抑うつ、自尊感情度を従属変数とし、第1段階として回想の量および情緒的性質、再評価傾向の4つの指標を、第2段階として回想量と3つの回想の質的指標との積である交互作用項を説明変数として投入する階層的重回帰分析を行った。青年群、老年群、青年群、老年群の4群に行った（Table 8参照）。なお多重共線性の問題を除去するため、独立変数はそれぞれ平均数からの偏差に変換して用いた（Aiken, & West, 1991）。

分析の第1段階において、肯定的回想は老年群男性群のみで適応度の高さを、また否定的回想は老年群女性群と青年群の男女で適応度の高さを説明していた。そのため世代および性別によってその関連が認められるものの、ポジティブあるいはネガティブな回想の想起しやすさは適応度の高さを説明する可能性が示された。しかしながら回想量と再評価傾向は、老年群と青年群のあだで異なる結果を示した。青年群の男女ともに再評価傾向は適応度を説明しなかった一方で、回想量は説明しなかった。そのため老年群には、回想量の多さは適応度に関連しないが、過去のネガティブな出来事の再評価傾向が高いことは適応的と考えられた。

また老年男性群では、回想量は適応度と有意な関連を示した（抑うつ度：β = .250, p<.05；自尊感情度：β = -.237, p<.05）。しかし再評価傾向は老年群の男女ともに適応度を説明しなかった。そのため老年群には、ネガティブな出来事の再評価傾向が高いことは適応的とは言えないが、回想量が多いことは非適応的だと考えられた。しかしながらこの関連は男性において顕著であり、女性では明確ではなかった。

分析の第2段階では上記の変数に加えて回想量と肯定的回想、否定的回想、再評価傾向の3つの回想の質的指標との関係を考察するための交互作用項を説明変数として投入した。その結果、交互作用項の投入による決定係数の増加は老年群男性群において自尊感情度を従属変数とした場合に有意であり（△R²= .140, △F(3,100) = 6.82, p<.001），肯定的回想と回想量による交互作用項の寄与が有意だった（β = 316, p<.01）。また決定係数の増加は有意ではない。
Table 8 適応指標に対する回想の量および質の階層的重回帰分析

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>老年女性群</th>
<th>老年男性群</th>
<th>青年女性群</th>
<th>青年男性群</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>独立変数</td>
<td>人生満足度</td>
<td>押う度</td>
<td>自尊感度</td>
<td>人生満足度</td>
</tr>
</tbody>
</table>
| 第1段階  
回 想 量  
肯定的回想 | .250* - .237* | .263** - .316** | .287* - .457** - .303* | .298* - .382* | | | | |
| 否定的回想 | -.328** .265* | -.338** - .328** | .240** .282** .229** | | | | | |
| 再評価傾向 | .136* .135* | .152** .164** | .173** | | | | | |
| 決定係数($R^2$)| | | | | | | | |
| 第2段階  
回 想 量  
肯定的回想 | -.195* .312** - .302** | -.207* .283** - .326** | .444** | | | | | |
| 否定的回想 | -.338** .264* | -.387** - .345** | .307* - .376** | | | | | |
| 再評価傾向 | .282* | | | | | | | |
| 回想量×肯定的回想 | | | | | | | | |
| 回想量×否定的回想 | | | | | | | | |
| 决定係数($R^2$) | | | | | | | | |
| 決定係数の増分($R^2$) | .145 | .141 | .074 | | | | | |

数値は標準偏回帰係数 *p<.05 **p<.01 ***p<.001

が（△$R^2=.055$, △$F(3,100)=2.31$, n.s.), 同様の交互作用項の寄与が人生満足度でも有意だった（β=.282, p<.05）。しかしながら老年女性群や青年群ではいずれの交互作用項の寄与も認められなかった。そこで老年男性群と肯定的回想と回想量に対し、回想量の得点が平均値および±1SDにおける肯定的回想の単回帰直線を求めた（Figure 1および2参照）。

その結果、回想量が少ない老年者はポジティブな回想の想起しやすさに関わらず適応度は一定であったが、回想量が多い老年者はポジティブな回想を想起するほど適応度は高く、ポジティブな回想を想起しないほど適応度は低いと考えられた。そのため回想量やポジティブな回想の想起しやすさが単独で老年者の適応度を説明するというより、そうした要因が関連し合うことで適応度を説明することができた。

全体的考察

本研究の結果はFry（1991）の先行研究を支持しており、回想量とその質的指標の間には青年男性群を除いてほとんど相関が認められず、概して独立したものであると考えられた。一方で、青年男性群において回想量とその質的指標との間に相関が見られたことは、両者が互いに独立しているとは言えないことを示している。

また重回帰分析の結果より、老年期の男性では、回想の量が多いほど非適応的である一方で、ポジティブな回想想起しやすい場合には適応的であるというように、それぞれ適応度と異なる関連をもつ可能性が示された。

世代差および性差について

回想と適応度との関連には、世代により異なる特徴が認められた。そして青年群ではほとんど性差が認められなかった一方で、老年群では顕著な性差が認められた。

青年が自分のアイデンティティを確立するプロセスで、しばしば回想を用いている可能性が指摘されている（長田・長田, 1994）。先に示した分散分析の結果より、青年期の回想やネガティブな出来事を再評価する傾向が老年期よりも高く、また重回帰分析の結果、これらの指標の適応度の高さをよく説明した。こうした結果は、青年が様々な価値や役割を同一化したり抵抗しないプロセスにおいて、しばしば過去のネガティブな出来事を振り返って再評価しようと試みていることを示すと考えられる。青年期の男性で回想量その質的指標の相関が認められたのは、回想において否定的な出来事の想起やその再評価が頻繁に行われていることを示すかもしれない。しかしながら本研究では、なぜこうした関連が青年期の男性のみに顕著であり、女性では認められなかったのかは検討できなかった。

これに対して老年群では、適応との関連において男女で特徴的な違いが認められた。

老年男性群では回想量と肯定的回想の想起しやすさが適応度を説明し、ほかの3群と異なって否定的回想は適
年期における回想の質と適応との関連

応度を説明しなかった。そして青年期にはシナジーな出来事を再評価することは適応的であり、回想の多さは適応度に関連しなかったので対照的に、老年期にはシナジーな出来事を再評価することは適応的とはいい、回想の多いことは非適応的だと考えら

このような世代差は、両者にとって回想のもつ意味が異なることを示すかもしれません。青年期における回想とは、自分自身を内省して理解するために行われ、解決すべき問題を振り返るための存在とされる。そのため再評価することは重要視されている。しかし老年期にとっての回想は、しばしば「過去を再評価しようとする时刻に至るため」存在している。たとえ老年期が過去の困難な葛藤を抱えている場合、そのことをあらためて理解することはかえって心理的な負担を生み、再評価しようとするプロセス自体が不快な経験となる可能性がある。そのため過去は再評価するよりもむしろ思い出さないように努めることが老年期にとって容易で有用な方策であると考えられる。

老年期においては、シナジーな回想起を除いて回想起に関する尺度は適応度を説明しなかった。また性格特性との関連では、老年期の女性は他の群と異なり、神経症傾向はシナジーに基づいた回想起がその結果を説明せず、その一方で再評価傾向の減少を示した。そのため老年期の女性で、神経症傾向に関わらずシナジーな回想起を想起するが、過去を再評価する程度は神経症傾向の高さと関連すると考えられた。

このことに関連して、老年期の性差に関する研究（例えばSmith, & Baltes, 1998）では、老年期の男性は女性よりも抑うつ症的主観的ウェルビーイングが高く、より多くのシナジーな感情を経験しているとされる。その理由として、多くの女性が男性よりも配偶者や家族の死別を経験して独居であること、また女性は男性よりも自己の内的な感情運動を発表する傾向があり、シナジーな感情を認めやすいことなどが挙げられている。

老年者の心理的適応や幸福感に対して、配偶者との死別者の有無や友人や家族による社会的支援などの要因が影響を与えることがこれまでにも指摘されている（例えば岡林ほか, 1997）。本研究の対象者は老年女性群の約半数（予備調査において62名中34名）が伴侶との死別を経験しているのに対し、男性群で伴侶と死別していたのはわずか（予備調査における102名中5名）であった。伴侶を失った老年期の女性が死別について回想し、それを再評価しようと試みている可能性は充分に考えられる。そのため、こうした要因が性差にある影響を統制した上で、さらに詳細な検討を試みる必要があるだろう。

老年期における回想の質と適応との関連

重回帰分析の結果からは、老年男性群のみではあるが、回想量と肯定的回想との関連が示された。そして回想量が少ない老年者はポジティブな回想の想起しやすさに関わらず適応的だが、回想量が多い老年者はポジティブな回想起するほど適応的であり、想起しないほど非適応的な傾向を示した。

この結果は、LoGerfo (1980) の強制的回想やWebster (1993) の苦痛の再現といった回想機能をよく説明すると考えられる。すなわち、回想はしばしば老年者にとって苦痛で困難な経験となるにも関わらず、彼らは時として不快な過去を強制的に振り返る場合がある。過去のつらっく悲哀の出来事を再びしなかったのは個人の記憶にしみることで残り、それは彼らに今なお過去の苦痛を振り返らせる誘因となるかもしれない。

そのため老年者の過去がシナジーな思い出に占われる場合、頻繁に回想を行うよりも、むしろ回想を行わないほうがより適応的であると考えられる。回想による
ネガティブな影響を遮って過去を取り返さないことなどは、それ自体に価値ある自然な行為であり、老年者が適応を維持するために有益な手段となるだろう。

Coleman (1986) は、長年にわたる断続的研究の結果、過去を好むはかと適応の高さの間には一義的な関連が認められないことを示唆している。回想すること、あるいは回想を行うことが適応的であるかどうかは、その個人が歩んできた人生の道筋や現在の生活環境、そして現在の観点から過去をどのように捉えることができるかといった要因が影響していると考えられる。

本研究では老年期の回想と適応度との関連に性差が認められ、回想の量やその質的指標が男女に共通して適応度を説明することなかった。しかしながら、老年期の男性ではそれらの要因が関連せず、適応度を説明できる可能性が示された。これまでの研究の多くは、回想の量はもしくは質的な観点のみに注目されている。したがってこの結果は、回想の適応的意義を検討する場合には、これらの要因をともに検討することが重要であると考えることができた。

だが、こうした結果は解釈する場合に考慮すべきいくつかの要因がある。本研究の対象者は、一般に前期高齢者と呼ばれる比較的健康な60歳代後半の老年者である。彼らが行っている回想は、老年者が“死が近づくのを意識することで自然に生じる回想（Butler, 1963）”とは異なるかも知れない。ひとくちに老年者といえども、その年代の違いによって、回想が果たす役割は一様であるとは限らない。こうした結果は従来の高齢者の含む老年者全般において考えるのが適当であると考える。

また回想のモダリティ、あるいは研究方法の違いという問題も残されている。本研究では質問紙を用いて検討しているため、ここで扱っている回想とは、いわば“個人が日常的に行う回想”や個人の回想スタイルに相当すると考えられ。これらがButler (1963) のライフイベントやHaight et al. (1995) の実践的回想と同一のものであるとは認められない。本研究では、過去を再評価する傾向は老年期の適応度の高さを説明せず、回想において評価の要素が重要な役割を果たすとしたHaight et al. (1995) の見解とは異なる結果を示した。しかしながら、このような結果の相関が認められたのは、扱っている回想のモダリティが異なるためである可能性がある。そのため、個人が日常的に行う回想とライフイベントのような療法的回想は異なる意味をもつという前提に立ち、その上で、実際に回想を行うことが果たす役割や適応的意義が検討されなければならない。

欧米では、施設入居者やデイケア利用者などを対象とする療法的回想に関する研究は盛んに行われており、日本でも、野村 (1998) や黒川 (1994) を中心として回想法の実践的な利用やその研究が進められている。今後はこうしたフィールドにおいて試みられている療法的回想についての検討が必要であろう。
research, methods, and applications (pp.179–192). Bristol, PA: Taylor & Francis.

謝辞
本研究を実施するにあたり、財団法人京都SKYセンターの皆さま、医療法人明徳会の秋山慶也さんと大原記念病院備添生デイケアスタッフの皆さま、聖徳大学短期大学部教授長田由紀子先生、東京都立保健科学大学教授長田久雄先生に多大なご支援を頂きました。ここに記して厚く御礼申し上げます。
Nomura, Nobutake (Graduate School of Psychology, Faculty of Letters, Doshisha University) & Hashimoto, Tsukasa (Department of Psychology, Faculty of Letters, Doshisha University). Affective Quality of Reminiscence, Revaluation Tendency, and Adaptation in Old Age. The Japanese Journal of Developmental Psychology 2001, Vol.12, No.2, 75-86.

This study examined the adaptive function of reminiscence in old age, based on the hypothesis that the quality of reminiscence affects adaptation, rather than the quantity of reminiscence. A sample of 208 older adults (ages 60–82 years) and 197 younger adults (ages 18–30 years), all attending college classes, completed questionnaires including a Positive Reminiscence Scale, a Revaluation Tendency Scale, and measures of life satisfaction, etc. The results indicated that the affective quality of reminiscence was generally associated with life satisfaction and mental health, although there was some variation in this tendency according to respondent age and gender. The revaluation tendency was found mainly in younger adults. Only among elderly males, the quantity of reminiscence was associated with adaptive indices, and there was a significant interaction between the quantity and positive affect of reminiscence. These findings suggest that the quantity of reminiscence mediates between the affective quality (positive vs. negative) of reminiscence and adaptation in old age.

【Key Words】Gerontology, Reminiscence, Adaptation, Life review, Adult development

2000.4.13 受理，2001.2.6 受理